「第 1 次能登半島地震ボランティア報告」

2024 年 1 月 6 日
(社)神戸国際支縁機構
代表 岩村 義雄

・何日から現地に入ったか　1 月 5 日朝 5 時 15 分に第 7 次シリアボランティアから帰国し，その足で，村上裕隆代表と共に能登半島地震ボランティアに。
・拠点はどこに設定しているか　石川県最北端の珠洲市と輪島市。
・今回の支縁の主な内容（水、食料物資の提供など）　毛布，アルファ米，米，ブルーシート，水，救援金。
・およそ何日までいる予定か　7 日(日)夜まで，8 日に小生の講演があるため。14 日(日)から再開
・現地の様子・感想

1995 年 1 月 17 日に発生した阪神・淡路大震災は，マグニチュード 7.3 でした。人的被害は 6,434 人に及びました。燃えさかる類焼が兵庫県神戸市長田区の菅原市場を覆いました。同じように，1 月 1 日，輪島市河井町の約 200 棟を焼き尽くしました。輪島市はかつて 6 万人の人口でしたが，2 万 8 千人に減少しています。コロナ禍のため商いが厳しい氷河期を経て，ようやく新年に観光，新年の里帰りによる活況を見込んで，改築などをして期待して待ち望んでいた売り上げがないどころか，すべてを消失した悲哀感が漂っています。

国道 249 号線はいたるところが寸断されています。地震によるクレバスにはまり，身動きがとれなくなった車両もありました。無力感がこみあげました。

249 号線　七尾

輪島市に入る門前町浦上は完全に通行止めです。山の崩落のためです。胸がつぶれる思いになりました。石川県では解決できない規模なので，国土交通省(以後,国交省)が 3 日に介入すると地元の人は言っていましたが，5 日になっても手つかずの状態でした。穴水(あなみず)町から 1 号線で入ることによって輪島市河井町に着きました。

大正元年(1912 年)に創業した日吉酒造も損壊のため営業を再開することは困難と日吉啓子さん(73 歳)は，「もう建てなおす気力がありません」，と店の前で言われました。

日吉酒造の前。河井町
日吉啓子さんは精根尽き果てたと。

輪島教会の牧師新藤豪(つよし)さん(63 歳)に 6 日朝にお会いしました。「もう教会の再建はむずかしい」，と肩を落として話されました。足の踏み場はなく，床も剥離して危険でした。

地元でもよく知られている人気牧師。雨天にもかかわらず，朝市通りを丹念に案内してくださった。

新藤牧師に，最も被災の激しかった輪島市河井町朝市通りなど約 2 時間案内していただきました。見渡す限り，焼け野原です。あたかも空襲にあったようです。河井町の 7 階建ての五島屋ビルも倒壊しています。そのビルで心肺停止のため亡くなった女性もいました。

河井町を歩いていると，道路のあちらこちらに直径 1 メートルほど×高さ 1 メートルほどの柱が立っています。近づくとマンホールが隆起しているではないですか。どうしてか地元の方たちもわかりません。

にょきにょきと死海の塩の柱のように隆起しているマンホール。

半分倒れかかっている家がありました。1 階，2 階がつぶれて，重みで，3 階だけが残っています。3 階で寝起きしておられた奥野邦子さん(62 歳)の家は平屋のように無残に変わっていました。

三階にいたため，奇跡的に助かった奥野邦子さん。

焼け野原のような朝市通り

」

新鮮な魚，めじまぐろ，かんぱち，ひらまさなどが豊かな漁師町だった河井町の乾物屋，飲食店，輪島の漆器の高級な店も全部と言っていいくらい閉店です。電気は使えても，ライフラインの中で重要な水道が使えません。トイレは市役所，病院，避難所のふれあい健康センターでも 1 月 1 日

から使用できるところは輪島市のどこにもありません。コンビニ，郵便局，銀行も閉まっています。陸の無人島生活を余儀なくされています。市内に入る幹線道路は限られており，ほとんどの市民は金沢や富山県へ避難したかのように，夜はゴーストタウンと化していました。ガソリンスタンドは開店 2 時間前から待つ車列が延々と 1 キロほど続いています。

消防団員，役所，メディア関係者が堰を切ったかのように 6 日から現場を視察しています。そして立ち入り禁止の標示を記し始めています。浄土真宗大谷派の善龍寺，曹洞宗の蓮江寺も庫裡には反応がありません。おそらく避難所に行っておられるのでしょう。

私たちは残っておられる被災者に 14 日(日)に再訪問する約束をしました。今，現地で一番必要なことは傾聴ボランティアです。地震の揺れのひどさ，犠牲者，家，仕事，友を喪失した寂寥感に感情移入するソフトボランティアがたいせつです。外観の復興より，こころの復興をどうするかが問われています。暖房衣類，水，ブルーシートなどを搬入しましたが，マンパワーがないため配布，装着，手伝いができないのです。トイレのため穴を掘る力もいります。過疎,高齢化,少子化の限界集落と同じです。物質を提供すればよいとか，ハコモノを復旧すれば解決できる次元ではありません。日本全体が同じ痛みを共有する感性が求められています。さもなければ，火事場泥棒のように救援を装って，無人となった家に入り込み，金品を盗んだり，掃除，片づけ，運搬を手伝ったものの代金を要求する不埒な輩もすでに 3 日に遠方から来ていた体験を聞きました。弱みにつけこんだ詐欺まがいがあったと耳にしました。すると被災者もよそ者に疑心暗鬼になります。つまり，ボランティアは徹頭徹尾無償性ですることを小学校低学年から学ぶようにすべきです。そのためには，「官」が有償ボランティア，交通費支給するようになった中越地震以降のボランティアの働きを見直さねばなりません。無代価のはたらきが本来であるからです。自衛隊など「官」にすべてを丸投げするのではなく，日本人すべてが無関心ではなく，痛み,苦しみ,怒りについて共苦する縁が求められます。

祖先から自然をたいせつにしてきた価値観が明治維新以降，欧米に追いつくため，なにかたいせつな精神をデリートしてしまいました。そのためにインフラストラクチャー(infrastructure 略称・インフラ)優先が被災地の孤立化の原因となっています。地震，津波，台風に対して技術優先の制度ではアキレス腱が露出します。悪路，渋滞，パンクでいのち救済に赤信号でした。島国であるゆえに，海上輸送など陸路に代わる方策も練られたらどうかと思いました。大都会の能率，効率，便利さの追求型ではなく，「グローバルサウス」(南半球を中心とする新興・途上国) インド，インドネシア，トルコ，アフリカなど途上国の人々のようなおおらかさを取り戻したいものです。

最後に，能登半島地震ボランティアへ共同歩調をとられたい旨をご連絡いただいた諸団体の方たち，メディア関係者にお詫びします。輪島近辺では携帯の送受信ができず，インターネットにもつながらず，非礼の段,ご容赦ください。

以上